

循環経済ビジョン研究会（第1回） 議事要旨

日時：平成30年7月5日（木）14:00～17:10

場所：経済産業省別館1階104会議室

出席者（敬称略）

出席委員：

細田座長、今井委員、小野田委員、喜多川委員、嶋村委員、田島委員、馬場委員、張田委員、平野委員、村上委員

ゲストスピーカー：

ナカシマオペラ株式会社 久保 博尚氏

政府出席者：

経済産業省大臣官房審議官（環境問題担当） 岸本道弘

経済産業省産業技術環境局リサイクル推進課長 高角健志

経済産業省産業技術環境局リサイクル推進課 課長補佐（総括担当） 荒田芙美子

事務局：

三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社 環境・エネルギー部 清水孝太郎、加山俊也

議題

- ・ 研究会運営計画について
- ・ 資源循環政策の現状と課題について
- ・ 話題提供（久保氏、喜多川委員）
- ・ 「循環経済ビジョン（仮称）」の策定に向けた方向性について

議事概要（意見交換部分）

＜「循環経済ビジョン（仮称）」が扱う範囲とプレーヤーについて＞

- ・ 現実の問題を考えると、議論の範囲が狭くなりがちであり、これまでの議論はそうした事情からビジョンやコンセプトにまで踏み込んだ議論が行われることはほとんどなかった。本研究会では少し範囲を広げた議論ができると良い。
- ・ 「資源循環産業（仮称）」の具体的なイメージをつかむことが難しいが、廃棄物処理・リサイクル業等の既存産業だけでなく、ライフサイクルを通じた付加価値提供により、「モノを回すより価値を回す」ビジネスに注目すべきではないか。
- ・ ビジネスモデルや関係するプレーヤーは多岐に渡るのではないか。資源循環「産業」というレッテル貼りはミスリーディングになりかねないので名称に固執しない方が良い。
- ・ 再生材のマーケットがうまく拡大していけば、現在の業界構図は全く変わってくる可能性がある。これまでとは異なる業種が競合相手となる社会になるのではないか。
- ・ モノからコトへということで、AIやIoTの活用・導入と考えると、これまでの動脈・静脈産業に留まらないイノベティブなプレーヤーの出現も想定して考える必要があるだろう。

＜「循環経済ビジョン（仮称）」の発信先について＞

- ・ 「循環経済ビジョン（仮称）」は誰に向けたビジョンかということを改めて整理する必要がある。
- ・ 「循環経済ビジョン（仮称）」の読み手として、一般市民の方も想定する必要があるのではないか。若い世代では物事の考え方が変化してきており、コンセプトを整え、情報を発信していく良い機会であると感じている。一般の方にも伝わり、自発的な協力が生まれるようなビジョンとなるように工夫できると良い。

<「循環経済ビジョン（仮称）」で目指すべき方向性>

- ・ 「循環経済ビジョン（仮称）」を施策として推進する際のもの差し・指標が必要ではないか。指標の一つとしてGDPなどの経済性が考えられるが、拡大生産者責任などは経済合理性だけでは評価できない部分もある。中長期的な視点に立てば、短期的な経済合理性だけでは見えないものもあると思われる。
- ・ リサイクル事業者の立場からみると、循環経済の実現に向け、出口となる再生資源の市場を作ることが最も重要である。
- ・ 多くのリサイクラーが家業から企業になりきれていない。皆が上場企業を目指していけるような道筋を示せると良い。
- ・ 動脈産業と静脈産業の一体化・連携といった視点では、技術的課題と精神的課題の2つがある。後者は、いままで使ったことのない再生資源を使うことの心理的なハードルであり、目に見えず、定量化できないが、大きな課題となる。これをクリアしていく必要がある。
- ・ これまでのリサイクル事業における成果物は、バージン製品と比較したコスト合理性のみが付加価値であり、モノづくりの努力や成果に報いた付加価値の創造がほとんど行われてこなかった。環境への貢献といった部分で付加価値を創造することができれば、循環経済に即したモノづくりの大きな原動力となる。
- ・ 日本には技術があり、必要なプレーヤーも存在するが、現状ではビジョンやコンセプトがまとまっていない。まず、バリューをどう生み出すのか、アクターが誰なのか、そのアクターはどこから出てくるのか、を明確にする必要がある。産業という括りは重要ではなく、国としてどう豊かになっていくのが重要。その豊かさを表す指標は、難しいかもしれないが、バックデータとして整理しておく必要がある。ただし表に出す必要は無い。欧州のCEPでも容器包装ごみのリサイクル率等月並みな3指標しかない。本研究会でも、打ち出すビジョンによりどのように豊かになるかという指標までイメージできる議論ができると良い。

<今後の議論の進め方>

- ・ この分野でこれまで議論されてきた内容については、共通認識を持ったうえで議論を進めるべき。
- ・ IT等により急激に変化する現在の社会情勢を踏まえ、どのようなロジックでビジョンを取りまとめしていくか整理できるとよい。現在の課題・問題点への対応、将来生じうる課題・問題点への対応という時間軸で整理する方法がある。加えて、ビジネスモデルのあり方、技術・テクノロジーのあり方という切り口での整理方法もある。
- ・ これからどういった社会を作るべきかという理想・夢を語る部分と、現実の問題への適切な対応の部分、両輪で進めて行くことが必要であろう。

以上